



明化の教育

5月号 (第467号)
平成31年4月26日
文京区立明化小学校
校長 溝畑 直樹

子供を自立に導く学校とは

校長 溝畑 直樹



入学式会場を一心に整える6年生

いよいよ平成最後の『明化の教育』発行となりました。元号が変わることをこのような形で迎えるのはもちろん初めてですので、「令和」という新元号が発表されてからの数週間は、日本中がある種の高揚感に包まれているような気がいたしました。そして、明治、大正、昭和、平成とその歴史を積み上げてきた明化小学校が、「令和」の時代にどのような発展を遂げるのか、期待に胸が躍ります。

さて4月号では、学校と保護者・地域とが共通にもつ教育に対する目標について、

【行動の目標】① 自立すること ② 社会と調和して暮らすこと

そして、この行動を可能にする意識（内面）の目標は、

【意識の目標】③ 私には能力があるという意識 ④ 人々は私の仲間であるという意識

この4つを示しました。しかしどのようにすれば、子供たちは「私には能力がある」という意識をもちながら「自立すること」ができるでしょう。哲学者であるカントは自立についてこう語っています。「人間が未成年の状態にあるのは、能力が欠けているからではない。他者の指示を仰がないと自分の能力を使う決意も勇気ももてないからなのだ。つまり人間は自らの責任において未成年の状態にとどまっていることになる。」では、人間はなぜ自らを未成年の状態に置こうとするのか、それは、「他者の指示を仰いで生きていく方が楽だから」です。失敗の責任も取らず、面倒な事は誰かが引き受けてくれますから。自立するということは恐ろしく、そして勇気がいることなのです。

私たち大人も気をつけなければ知らず知らずのうちに子供の自立を妨げていることがあります。例えば「ほめる」という行為。お殿様が家来に向かって「ほめてつかわす」などと言うように、ほめるという行為には少なからず上下関係が発生します。子供が親に向かって「えらい、よくできました。」と言うと違和感や不快感を抱くのは、本来、ほめるということが能力の高い者がより能力の低い者に対して行う行為だからです。私たちはほめられるほどに、その上下関係によって自分の能力の低さを意識するようになります。また、「もっとほめられたい」と願う子供たちは「どうすればほめられるだろう」と考えるようになります。それは周りの大人の価値観に依存した生き方をしていることに他なりません。

「私には能力があるという意識をもちながら自立する」ことを促す言葉、自立への勇気を呼び起こす言葉、それはほめ言葉ではなく、感謝の言葉です。「ありがとう」「助かったよ」この感謝の言葉を聞いた時、人は自分が他者に貢献できたことを知り、自らに能力があることを認識できます。みなさんもご自身のことを振り返ってみてください。人から言われて一番嬉しく、自分を誇らしく思う言葉は「あなたはすごい!」ではなく、「どうもありがとう」のはずです。

令和の時代、明化小学校は「ありがとう」の言葉があふれる、そんな人との関わりやつながりを大切にして、主体者として生きる子供たちを確かに育てていきたいと思っています。